

# 猫蓑通信

第 101 号

平成 27 年  
(2015 年)

11 月 30 日発行  
(年 4 回発行)

桃径庵二世

式田恭子宗匠を悼む

鈴木了齋

小春日和の十一月十九日夕刻、猫蓑会理事、日本連句協会理事の式田恭子さんが安らかに永眠されました。ご病気を伏せておられました。三月にご病気が発覚して以来、八ヶ月に及ぶ闘病、四回の入院の末のことでした。六十七歳の誕生日の翌日でした。

恭子さんは、お母上である猫蓑会副主宰、故桃径庵式田和子宗匠のお導きで、猫蓑会発足二年後の昭和五十九年に連句を始められ、猫蓑会に入会されました。俳諧歴は三十一年に及びます。平成十四年から「露」、十六年から「麻」の、二つの俳句誌に依って俳句を発表される、俳人協会会員でもありました。

現役の会社経営者としての多忙な日々のかたわら、お母上の和子宗匠が創始された桃径庵という実作の場を、実質的な桃径庵二世として守ってこられ、そこで毎月開催される四宮連句会を継承主宰し、年ごとと同会作品集を上梓して、今年で通巻十二巻に及んでいます。また猫蓑会の事務局長としてもお母上の業績を継がれ、病中も電話やメールを駆使して、そのお役目を滞りなく果たしておられました。

連句の捌き手、作者として、国民文化祭をはじめとする各種募吟でたびたび受賞するなど、多くの実績を残し、名手の評価を確立してこられました。常

に真摯に俳諧に取り組み、研鑽を怠らなかつただけでなく、指導者としても多くの後進を育てられました。恭子さんの捌く楽しい座を経験した方は、初心の方でも、連句の魅力を十分理解し、その後連句人として定着することが多かつたように思います。

快活闊達で行動力に溢れ、また、人への細やかな心遣いを忘れない魅力的なお人柄を、猫蓑会の内外を問わず、多くの連句人、俳句人から愛され、慕われておられました。ご葬儀で読み上げられた矢崎藍さんからのご弔電に、恭子さんを「現代連句界の至宝」とする形容がありました。多くの参会者の深く共感されるころだったと思います。

病中にもかかわらず、今年十一月開催の第三十回国民文化祭がしま二〇一五芸芸祭連句大会の募吟選者、また、同月開催のさきたま連句大会の募吟選者を滞りなくつとめられました。これらの選を通じて、ご自身も多くのことを学び、とりわけ、連句の最も基礎的な事柄をあらためて振り返り、確認できたことが、ご自身の捌きや作句の上でも、画期的な進境につながりそうだと語っておられました。

六月の同人会総会では、小池啓子捌歌仙「青蛙」(『猫蓑通信』百号2ページに掲載)に、また七月の猫蓑会総会では吉田酔山捌歌仙「小咄や」(今号3ページに掲載)に、連衆として加わり、多くの句を残しておられます。どちらの巻でも、恭子さんの付句は蕉風の軽みと撓りをよく体現し、範とするに足

## ●目次

第百三十四回猫蓑会例会作品 歌仙七巻……………	2
総会各座の座名は師系の庵号	
第二十五回猫蓑同人会作品	
歌仙八巻のうち後半四巻……………	6
事務局たより	8

る優れたものばかりで、この進境の一端を見せておられたと思います。将来にわたって新たな作品を残される可能性が失われたことは、本当に残念です。

恭子さんはかねてから、桃径庵二世襲名立机を強く望んでおられました。九月からその手続きが始まりましたが、諸般の事情で遅延し、正式に襲名が決定したのはみまかられた日の午前中でした。ご病床に報告したものの、すでに病い篤く、喜びの言葉をお聞きできないまま、お見送りすることになってしまいました。痛恨の極みです。しかし緑華亭孝子宗匠のご尽力で、直ちに立机免状を染筆押印していただき、翌日の枕頭にお供えできたことは幸いでした。

襲名後、実際に宗匠の名をもって活動されることなく亡くなられたことは、さぞご無念だったと思います。しかしこれまで恭子さんに播いていただいた種は、これからも俳諧の世界に多くの稔りをもたらしてくれるに違いありません。及ばずながら、そのために微力を尽くしたいと念じつつ、桃華院光明順恭大姉としてのご冥福を心からお祈りいたします。

切炬燵この結界に身をまかせ

恭子

(四宮連句会作品集第七巻「かげろふ」より)

二夜の座

歌仙「空を渡る」 鈴木了齋 捌

空を渡る絮かそれとも草蜉蝣 了齋  
 旅人笠を解く緑陰 蕉肝  
 太極拳しかと大地を踏みしめて ひろみ  
 玉露一服香り染しむ 路子  
 黒鍵のエチュード弾けば月冴ゆる 泉子  
 窓に時をり光る風花 齋  
 D51の煙吹き上げ走り行き み  
 隣のひとのハスキーな声 泉  
 君の夢はわたくしの夢けふからは 路  
 四人目の夫当てる辻占 肝  
 後半生買ふもの多き盆の市 齋  
 叩いてもなほ溢蚊の寄る 泉  
 有明海月は潮を引いてゆき 路  
 冥王星もう惑星ぢやない み  
 立ち読みに店主はたきをパタパタと 全  
 家訓の暦かける白壁 泉  
 百歳を越えたる花は神さびて 肝  
 穀雨の道をすれちがふ傘 泉  
 ナオ生しらす名物貰つる古都の春 路  
 外国人が囲む大仏 齋  
 どれもよく効く膏薬も目薬も み  
 藁打石のごえぬる土間 路  
 ひたすらにただ頼み込む選挙前 肝

猛暑が過ぎて憩ふひととき 路  
 わたくしは着衣のマハが好きですの 泉  
 あなたは恋に正直になれ 齋  
 抱き寄せる桃の実いつくしむやうに 路  
 万葉集をめぐる秋風 齋

川の字に眠る親子に望の月 泉  
 夜寒にひとつ上掛を足す 齋  
 ナウ利酒に連勝したる祝ひ酒 肝  
 靴の片方どこにあるのか 肝  
 黒ダイヤ染えた頃の木賃宿 肝

犬は代々柴犬を飼ひ 齋  
 晴天の落花にわが身飛ぶごとし 齋  
 山が笑つて湖が微笑む 執筆

連衆 近藤蕉肝 江津ひろみ 倉本路子  
 青木泉子

対塔の座

歌仙「タイムカプセル」 坂本孝子 捌

少年のタイムカプセル草いきれ 吉文  
 ハンモックには褪せたジーンズ 霞  
 操舵室魚群探知機見つめぬて 転石  
 暮の灰を落す左手 孝子  
 月明しカウンターテナー高らかに 美奈子  
 翻りつつ帰るつばくら 奈  
 秋深きこちら男湯紺のれん 石  
 誰が末裔か気風よき娘よ 奈  
 鞍上に攫はれてより夢心地 石

テレビゲームのボタン早押し 吉  
 妖精の如く宙舞ふグランジユテ 霞  
 樹氷林には蒼き月影 吉  
 ひとり酒爛は熱めに葱鮎鍋 奈  
 強行採決これでよいのか 全

真夜中の柱時計がbonと鳴り 霞  
 鳩が飛び出すマジシャンの帽 吉  
 地下鉄を昇れば六区花嵐 石

小さき秘仏に春惜しむ寺 吉  
 ナオ異国語の観光客はうららかに 全  
 バターと混ぜて食べる納豆 霞  
 繙ける雑学大全めぐり癖 石  
 猫と楽しむ株の配当 全  
 かみさんはこの頃励むフラダンス 吉

避暑地の恋は期間限定 霞  
 亜麻色の指をこぼるる洗ひ髪 奈  
 漂泊の画家マハに溺れし 霞

禁制の砂金麝香は倉の中 石  
 巨石に宿る大地母神は 奈  
 浮島に笛仕る月今宵 霞

手作り柚餅子軒に吊せる 石  
 ナウバス連らね修学旅行紅葉狩 吉  
 ハングルで名を書ける旧友 吉  
 町工場技術五輪で優勝し 石  
 試し刷りする選挙公報 奈

花の闇はや喧騒の跡もなく 石  
 ダッシュボードに揺るる紅貝 石

連衆 永田吉文 高塚霞 林転石  
 鈴木美奈子

泊船の座

歌仙「花合歓や」

本屋良子 捌

花合歓や短冊揺れる芭蕉庵

良子

枝折戸潜る麻服の人

雅子

鉛筆を削れば著き香の立ちて

アンズ

愛着のある傷の文机

文伸

山の端に今宵の月の現るる

郁子

鍵の手になり雁渡りゆく

郁

ウ 美術展じつくり見入るリトグラフ

郁

ワンボックスを好む若者

伸

運命の君にいつかは出逢ひたし

雅

打てば響いてLINE陸言

ア

杜からの教会の鐘厳かに

郁

マルシエに選ぶ新鮮な牡蛎

雅

雪晴れのカルチエラタンに月を浴び

ア

屋根裏部屋に通ふ黒猫

伸

また一杯もう一杯と酌み交はし

雅

恩師の慈顔夢のあはひに

ア

みちのくの花の名所を巡るらん

伸

黄蝶白蝶舞ひ遊ぶ里

郁

ナオ 眠りある嬰の腕の種痘痕

雅

怪奇譚なら爺に任せろ

伸

ゴミ屋敷芥に宝物あるや

ア

相続税に頭痛める

全

家苞の細身になりし鮎の菓子

良

山伏姿共に峰入り

捨てたはずなのに煩惱でふものが

転がり込んだ恋の衝撃

銀座裏妖婦めきたる占師

生命線の長い掌

一湾に遍く月の煌々と

故郷より届く豊作の報

ナウ 蟋蟀のジミーと歌ヘピノッキオ

魚の腹で哲学をして

広場には少年野球楽しげに

幸運を呼ぶ屋根のシーサー

日もすがらウタキに延べる花筵

見上ぐる方に美しき初虹

連衆 武井雅子 松島アンズ 若林文伸

東 郁子

鳥翠の座

歌仙「小咄や」

吉田醉山 捌

小咄や思はず咽る心太

気ままが宜し軽き甚平

新開地隣の家にくつつきて

郵便受けに届く夕刊

見送りし遠距離バスは月の中

振り返り聴く鈴虫の声

ウ 千代尼忌に髪は丸鬘櫛をさし

メールで短歌恋の告白

マニユアルがなくて一線越えられず

がんこ親父が愚痴る飼犬

またうどにやつて来ました宮仕へ

北風に立つ衛兵を撮る

月静か雪靴の跡点々と

高校球児部室乱雑

ママの味ファストフードに負けてゐる

買物自転車きかぬブレーキ

百間の濠に枝垂るる城の花

子孫に伝ふ団扇張る術

ナオ 春日和謡の稽古縁側で

国会中継あかず眺める

准教授持論ばかりを主張して

もうこれ以上は死ぬと飲む酒

極楽も地獄も行けば皆素敵

四畳半には竹夫人あり

合歓の花つぼむを待ちて忍び寄る

愛の足りない私叱つて

連綿体かな文字習ふ細き筆

かすかな咳は病身の祖母

教会に真夜中の月くつきりと

葛紅葉生ふ開かぬ裏木戸

ナウ 美術展巨匠の作に声もなく

防犯装置誤つて押す

長男は検事に次男弁護士に

シャンソンデュエツト巴里の街中

旅先の化粧ポーチに花の片

豆に群がる鳩ののどらか

連衆 橘 文子 式田恭子 國司正夫

三木俊子

平成二十七年七月十五日  
於 江東区芭蕉記念館

暮柳の座

歌仙「会半ば」

佐々木有子 捌

会半ば扇休まず動かかな

有子

サマードレスのとりどりの色

照子

応援団声を限りに張り上げて

忠史

北に流るる雲の遅早

秀樹

新幹線月を右手に走り行く

曜子

秋蚕の出来のたより楽しみ

史

ウ 村芝居隣へ廻す奉加帳

全

幼なじみのお染久松

照

叱られて直せないのが浮気癖

樹

それでもあなたのユーモアが好き

曜

競技場オリンピックに間に合ふや

史

赤ふんどしで子らは寒泳

照

月天心かすかに軋むお神渡り

樹

山の彼方に幸せは住む

史

自転車で横断の夢ユーラシア

曜

札束抱へ買物の列

樹

花に鐘歴史哀しき大伽藍

史

吸物碗のあをさ香ばし

照

ナオ 振袖を畳紙に包む暮の春

曜

名も無き草の埋める化野

樹

戦争を知らぬ総理の自衛論

全

何度打つてもライン非通知

史

切れかけた誘蛾灯でも役に立ち

有

祭を追うて今日はどこまで

樹

手作りのお守袋大切に

照

ふたり寄り添ふ凍窓の影

史

マンションを若きつばめにプレゼント

曜

取つても取つても浮いてくる灰汁

照

ふと見ればかくも大きな望の月

全

紙飛行機の稲架に止まりて

曜

ナウ 背を丸め新酒温める傘寿翁

樹

何度も聞いた長い能書

史

回想の小学生の滑り台

樹

チワワ抱きあげ頬ずりをする

照

ポトマック河畔埋める花の雲

有

高き記念碑陽炎の中

曜

連衆 田所照子 根津忠史 青木秀樹

前田曜子

はんすい 泮水の座

歌仙「炎帝の」

松原弘子 捌

炎帝の呵呵と笑へる陽射しかな

弘子

池面波なく風も死す頃

淳子

掛時計けふもねぢ巻く店蔵に

健

ニツキ鉛など選ぶ弟

一枝

山の端に待宵月の昇りくる

昭

仙道に聞く小牡鹿の声

健

ウ 秋袷裾をきりりと着こなして

淳

ポルシェ飛ばして逢引の場所

昭

美少女のすすめる盃はほろ苦く

枝

離婚届を出して清々

淳

寒夕焼天草五橋輝かす

全

オラシヨ漏れくる凍月の窓

枝

名物のうどんさすがに腰があり

健

鍋を打ち出す職人の技

淳

国宝は4K画面に映されて

枝

眠気を誘ふ図書館の椅子

昭

想ひだす花の盛りのワシントン

健

揚雲雀鳴き天の高みへ

昭

ナオ 春炬燵抜け出し後の丸きまま

淳

母に教はる箸の持ち方

枝

老教授リハビリ故か休講に

淳

アランミクリの遠近両用

枝

風通し兼ねた歌麿展のぞく

昭

嫌ひが好きとわからない野暮

淳

肉食系口説き上手の別れ下手

健

油地獄の恋の清算

枝

ひとり旅露天風呂にて羽伸ばし

全

無重力での五回転半

健

月照らす石州瓦黒々と

淳

お地藏様に柿の供はり

健

ナウ 親子して組み上げてある下り築

昭

戦なき世を夢み九条

淳

熱さには抗す術なく蠟細工

健

カフエの看板丸文字で書く

枝

花の下クインテットの軽やかに

弘

紋白蝶のとまる制帽

昭

連衆 上月淳子 由井健 西田一枝

松原昭

呉竹の座

歌仙「優曇華や」

高山鄭和 捌

優曇華や木戸を潜れば記念館

鄭和

額の汗にこちよき風

富子

一列に声を揃へて走るらん

敦子

幼を乗せた自転車がくる

久美子

雲の間にひそと顔出す居待月

士郎

茸狩成果箆に山盛

久

ウ 倅せはこれよ花野を前にして

全

フオークダンスでつなぐ手と手

富

もう十年そろそろ別れる頃かしら

士

博愛主義で生きる人生

富

町営の貸し農園は期限付

全

ランチお誘ひ駅前のカフェ

敦

凧に襟立て月は千切れさう

久

冥王星は氷戴く

和

我が友は格下げされて窓際に

久

色即是空と論ず老僧

富

花筏ちがふ世界を目指す旅

敦

沖合はるか蜃気楼揺れ

士

ナオのどらけし手書き染しむ若きは

久

カパーしきりなユーミンの歌

敦

捨て猫を昔は拾ふ人ありき

士

荒れる空家に困る自治体

久

ガラガラと福引の玉白ばかり

敦

平成二十七年七月十五日  
於 江東区芭蕉記念館

手妻よろしく寒卵立つ

久

ほろ酔の客は揃つて千鳥足

士

できちやつたのよライン着信

敦

結婚式親への義理と嘯いて

富

生命保険みなほしてみる

敦

残月の高きに皓と夜勤明け

富

煙上げずに秋刀魚焼く鍋

全

ナウ爆買ひの豪華客船そぞろ寒

久

奇数は嫌ひ偶数が好き

敦

十八才青き悩みを抱へて

富

世の中なぜかうまくころがる

士

佇めばただ濡れそぼつ花の雨

和

山裾に聞く小綬鶏の声

敦

連衆 名古屋富子 武井敦子 副島久美子

横井士郎

### 総会各座の座名は師系の庵号

猫蓑例会実作会での座名には、毎回頭を悩ませます。例会は年に四回、四季ごとに一度ずつありますが、各季の季語はすでに使い尽くした感があります。二度目、三度目があってもかまわないようなものですが、なんとか目先を変えようといついつい試行錯誤します。

今年の猫蓑会総会実作会での座名について、読めない、意味がわからないという声が多くありました。実はこれらは、元禄の松尾芭蕉から明治の馬場凌冬に至る、猫蓑会師系七代の各宗

匠の庵号にちなむものです。

「泊船の座」は、芭蕉庵の旧名「泊船堂」によるものです。泊船堂は深川隠棲当初の芭蕉の、宗匠としての庵号でもありました。横須賀港に面して（現在は米軍基地内）、夢窓国師の寓居だった「泊船庵」の史蹟記念碑がありますが、墨水に面しての「泊船堂」の名は、芭蕉の禅への傾倒を示すものだったのかもしれない。

「鳥翠の座」は、鳥翠台立花北枝、「暮柳の座」は暮柳舎和田希因にちなむものです。「二夜の座」は二夜庵高桑蘭更、「対塔の座」は対塔庵成田蒼虬、「泮水の座」は泮水園八木芹舎、「呉竹の座」は呉竹園馬場凌冬の庵号から拝借しました。

これらの庵号の読みは必ずしも定かではないのですが、「○○庵」「○○亭」などの漢字二分「○○」は、二字とも音読みすることが普通（芋庵は例外）なので、収録にあたって音読み、歴史的仮名遣いのルビを付しました。

庵号は必ずしも一人につきひとつではなく、途中で名乗りを変えたり、あるいは並行して二つ、三つの庵号を使い分けることもあったようです。これらの宗匠は、この順序で師弟関係にありますが、必ずしも師の庵号を継いでいるわけではありません。蒼虬は一時期、蘭更の庵号のひとつであった「芭蕉堂」を二世として継いでいますが、後にそれは千崖に譲り、弟子の芹舎は独自に「泮水園」を名乗っています。この後、八代、芋庵根津芦丈を経て、九代、猫蓑会の創始者である猫蓑庵東明雅師に至ります。（文蔚）

暑き日をの座

歌仙「額あぢさゐ」

青木秀樹

捌

濡れそぼつ額あぢさゐの小宇宙

秀樹

窓から窓へかかる蜘蛛の圍

泉子

若きらのスマホのタッチ滑らかに

節子

バックバックをひよいと揺り上げ

アンズ

気がつけばいつの間にかやら月昇り

弘子

急転直下高潮の報

泉

ウ 身に沁みて身の上話などを聞く

節

武勇伝ある女子会の酒

ア

婿入りの障りは猫のアレルギー

全

ハウスダストを除く掃除機

泉

建て替へて座敷わらしもそつと出る

節

旅に遊ぶが唯一の趣味

弘

バケットにイベリコ豚とモツツアレラ

ア

神の留守とてにんまりと月

泉

ぼんさんが簪買って懐手

ア

太平洋はうちの庭なり

節

飛花落花コントラバスの音響く

全

ここで一席笑ひのどらか

泉

ナオ 夏隣思ひ出いつばい逝きし人

ア

体内時計狂ふこの頃

泉

時差ぼけにコーヒー熱きエアポート

ア

やつとここまで後期高齢

弘

ざんげ録伏字の名前想像し

泉

AとBとでOは無いのか

樹

内科より眼科の先生やさしさう

弘

演出のつく謝罪会見

ア

猿山のボスの跡めを狙ふ奴

泉

甘藷は海の水で洗つて

ア

月中天金波銀波を分けて漕ぐ

全

開店祝届く新絹

弘

ナウ あれこれと長女の振るふ仕切り癖

泉

キャッシュカードで済ます買物

弘

母の絵を見せ合ふ園児賑やかに

節

地産地消で村の繁栄

全

初花に長寿を祝ふ文を書き

樹

視野をかすめる白きてふてふ

ア

連衆 青木泉子 長坂節子 松島アンズ

市野沢弘子

早稲の香やの座

歌仙「唱歌集」

島村暁巳

捌

六月や所在なく繰る唱歌集

暁巳

大き口あく軒の子燕

雅子

着々と電線地下化進むらん

英美

スマホゲームにみんな熱中

鄭和

山の端に今宵の玉兎見事なる

郁子

早稲の香かすか匂ふ畦道

雅

ウ 古窯にちちろこほろぎ棲みついて

芙

妻とアマンが夢に出るとは

全

男振りただ一筋に恋焦れ

郁

白い髭剃れ長い爪切れ

和

サミットがやつて来るぞと伊勢の宮

雅

海産物の並ぶ浴道

郁

丁寧に祖父が手掛けし冬襖

芙

等伯の鷹月を抱ける

和

半島の港から出る大船団

全

いつも賑やかユニクロの店

雅

園児等のかごめかごめの花の下

芙

喰われぬやうに払ふ春の蚊

雅

ナオ 空海忌熊野古道を独りゆき

全

眠れぬ夜は羊数へる

芙

友どちは寿限無寿限無とくりかへし

郁

白洲するめと言はずお奉行

和

ご無体の姫は汗疹の七つにて

全

脱げた水着の紐のちりぢり

巳

帳尻はなかなか合はぬ奴のこと

雅

チヨコレートホイップ尖んがっている

芙

名処の銘酒を提げて来る息子

郁

久の出逢ひに懐く愛犬

全

エトランゼ溢るる銀座月円か

雅

時計の店の主爽やか

巳

ナウ 故郷は豊作豊漁好景気

郁

NPOの若きリーダー

和

ゆるぎ坂登ればそこに文学碑

芙

大黒柱かかる日めくり

雅

蔵前の家族写真に花吹雪

巳

南の空愛つる初虹

郁

連衆 武井雅子 間瀬芙美 高山鄭和 東 郁子



事務局だより

●第百三十四回例会（平成二十七年猫養会総会）が開催されました

七月十五日（水曜日）江東区芭蕉記念館にて、猫養会総会が開催され、議事ののち、七卓に分かれて歌仙の実作を行いました。当日の作品は今号の2～5ページに掲載しています。

●新体制（総会にて承認）

- ・会長 青木秀樹
- ・副会長 鈴木了斎（広報担当）
- ・理事 式田恭子（事務局担当）  
武井雅子  
林 転石（会計担当）
- ・同人会長 坂本孝子

●第百三十五回例会（東明雅師十三回忌興行）が開催されました

十月二十一日（水曜日）江東区芭蕉記念館にて、明雅師十三回忌追善正式俳諧、ならびに脇起追善源心実作が行われました。詳細は次号にて。

●今後の予定

・第百三十六回例会 平成二十八年初懐紙  
一月十六日（土曜日）受付十一時半より  
於 原宿南国酒家

・第百三十七回例会 亀戸天神社藤祭興行  
奉納正式俳諧 二十韻実作

四月二十日頃 於 亀戸天神社

・第二十六回猫養同人会総会 六月下旬

●猫養基金にご協力ありがとうございます

・東 柚子様 平成二十七年十月 三十万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●会員の受賞

・第三十回国民文化祭かごしま二〇一五芸芸祭連句大会

文部科学大臣賞

半歌仙「母も子も」の巻

石川 葵 捌

鹿児島県知事賞

半歌仙「武蔵の錨」の巻

木村ふう・生田日常義両吟

国民文化祭鹿児島県実行委員会会長賞

半歌仙「朝北風や」の巻

平林柳下・上田真而子両吟

鹿児島県連句協会会長賞

半歌仙「高西風の」巻

鈴木了斎 捌

上記四作品は次号（第百二号）に掲載予定です。

●転居

・鈴木英雄 横浜市南区内にて転居

・鈴木美奈子 千葉県松戸市へ転居

●新宗匠

・十一月十九日午前十一時開催の猫養会臨時理事会にて、猫養会理事、式田恭子丈の、桃径庵二世宗匠襲名が承認されました。式田恭子理事ご本人は

病中のためご欠席でした。

●訃報

・十一月十九日午後五時十二分、桃径庵二世式田恭子宗匠が永眠されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。戒名 桃華院光明順恭大姉

●訂正

・前号（第百号）4ページ

「亀戸天神社藤祭正式俳諧 俳諧之連歌二十韻」  
挙句、「地平線まで続く弥生野」を「蝶の遊べるまどやかな空」に訂正

●バックナンバー

・「猫養作品集」バックナンバーご希望の方は鈴木千恵子まで。  
「猫養通信」バックナンバーはすべて

<http://www.neko-mino.org>  
にて閲覧、ダウンロードできます。

●今号は、諸般の事情により大幅に発行が遅れ、減ページ発行となったことをお詫びいたします。

季刊 『猫養通信』第百一号

平成二十七年十一月三十日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイイト株式会社